

經濟論叢

第七十四卷 第二號

- 幕藩體制の危機について……………堀 江 英 一 (1)
- 阿波藩における近世村落の形成過程……大 槻 弘 (3)
- 宮津藩における農民的商品經濟をめぐる
領主と農民の關係……………池 田 敬 正 (21)
- 近世村落の構造變化と村方騒動……………内 藤 正 中 (39)
-

[昭和二十九年八月]

京都大學經濟學會

幕藩體制の危機について

——簡單な解説として——

わたしたちはいま幕藩體制の解體過程——幕藩體制の危機と克服との過程を地域別・藩別に具體的にたどることを一つの研究課題としている。ここに収録させてもらった三つの論文は一つの統一にふしてこの研究の一部分を経済學會で報告したものをまとめたのである。この報告會でわたくしはこの三人の報告を統一し關連させる役割をひきうけた。そこでわたしが話したことを書いて、ここに収録した三つの論文を統一してみることにしたい。

徳川幕藩體制はほぼ享保期前後から危機段階にはいる。正徳・享保期の最初の農民一揆高揚と享保改革——明和・安永・天明期の第二の農民一揆高揚と寛政改革——天保期の第三の農民一揆高揚と天保改革、天保期以降いよいよ明治維新がはじまる。農民側の攻勢と領主側の對應というつばぜり合いをしながら、幕藩體制は危機をふかめてゆく。だから、危機の具體的形態をさぐるためには、わたしたちは一揆と對應、それを必然化する經濟關係をあきらかにせねばならない。ここにかかげた三つの論文はすべて享保期から文政期までの幕藩體制の危機をとりあつかっている。

ところで、幕藩體制の危機は享保期に突然おとすれたものでなく、幕藩體制がはじめからもつていた矛盾が享保期から爆發し深刻になっていったまでである。幕藩體制は、わたしが説明するまでもなく、生産物地代原則を實現する幕藩領主的土地所有と農民的土地保有に立脚する小農民經營という矛盾の統一體——武士全體と農民全體との對立物の統一體である。だから農民的の小經營が發展し農民的的商品經濟が生産物地代原則の基盤をほりくずしはじめると、幕藩領主はそのためにおこる財政窮乏をきりぬけるために、農民的の小經營と農民的的商品經濟との發展をおさえ收奪しようとする。享保期にはじまる幕藩體制の危機は、基本矛盾の發展として、發展する農民的の小經營・農民的的商品經濟（全農民）とこれをおさえようとする幕藩領主的土地所有（全武士）との對立の爆發である。

だが、幕藩體制の危機はそれ以外の要因から加重される。農民的の小經營の發展・農民的的商品經濟の發展は、當然のことながら、農民層の階級分化をうながし、農村内部に階級對立をうみだす。そしてこの農民層内部の階級分裂がさきの基本對立とむすびついて、幕藩領主と村落支配者層とがむすびつき、一般農民層と對立することとなる。こうした對立が田沼時代に世直し一揆として激化しはじめ、天保期には深刻となる。領主と農民との基本對立が農民層内部にまでもちこまれることとなった。

わたしたちは全體として幕藩體制の危機の深化過程をあきらかにしようとした。大槻君（のちに掲載されるものとあわせて）と池田君は阿波藩と官津藩とでこの深化過程を説明しようとし、内藤君は倉敷天領について世直し一揆の構造の内部關係をあきらかにしようとした。それが成功しているかどうかはひとびとの判断にまかせるほかない。なお續いて本誌で公表される大槻君の續稿と協田修君の新稿も同じ趣旨で書かれている。